〔平家物語四〕のぶつらかつせんの事

御ぐし○以仁王をみだり、重たる御衣に、いちめがさをぞ召れける、

〔玉蘂〕承元五年三月三日乙卯、今日奉幣春日御社、仍沐浴修祓、圖書頭在親朝臣、予○藤原道家正衣冠、降庭遙拜、了歸昇、幣物已下昨日沙汰、遣於權頭祐忠許、進小神寶金笠カサ置茵上、以水書諸願趣於笠、又御幣本爾同書之、此事見入道殿御記、皇嘉門院仰云々、先蹤必所願成就云々、可憑也、

〔嬉遊笑覽一容儀下〕慶長の頃の風を、古畫ども見て考ふるに、○中略又女の笠は市女笠にて、下にかつら布を、二布合せて縫たるを、後の方に尻の下までさげたるも有り、

〔甲子夜話六〕古畫ニ圖セル婦女ノ深キ笠ノ頂ニ、隆キトコロアル物ヲ冒レル多ク見ユ、此ヲイチメ笠ト謂フト聞ケリ、後或人ノ語レルハ、今モ吉野ノ奥ヨリ、木ヲ用テ作レル深キ笠ヲ出ス、其名ヲオチメ笠ト謂フ、其故ハ亂世ニ平氏ノ人落行テ、此山中ニテ製シ出セル物ナレバ、オチメ笠ト云トナリ、然ドモコレハ後人ノ附會ニシテ、オチメ、イチメハ、語音ノ轉訛ナルベシ、吉野ニ有ルハ、古風ノ傳ハリタルマデノコトナルベシ、

〔安齋隨筆後編十四〕一市女笠○中略　大和芳野にあり、八幡の安居堂祭、極月十三日也、此時用ゆる也、

〔守貞漫稿二十九笠〕市女笠○圖略

搢紳家武家トモニ供奉ノ人雨中用之、蓋堂上モ駕輿丁、仕丁等、白張ニ烏帽子ノ時ノミ用之歟、武家モ正月奴僕、白張、烏帽子ノ家ハ用之、凸形ハ烏帽子ノ上ニ著スベキ爲也、故ニ奴僕白張ヲ著セザル家ハ不用、眞竹篾粗製也、

〔我衣〕前ニ云經木ノヌリ笠、寛永時代若キ女カムル、万治以來老母計リカムル、小兒笠ハ小ブリニシテ、内ニ菊、ボタン、梅、椿、水仙、キヽヤウ、カキツバタ等ノ模樣、彩色ニカキタリ、子供笠ハ紅淺ギノ